

滝沢克己著「キリスト論の根本問題」(翻訳) (1)

芝 田 豊 彦

(解題)

滝沢克己(1909-84年)は、1956年5月10日、カール・バルト七十歳誕生日祝賀記念論集『応答』(« Antwort »)において、「何がなわたくしの洗礼を妨げるか?」(« Was hindert mich noch, mich taufen zu lassen? »)という表題の論文を寄稿した。この論文は、滝沢克己著作集第2巻432頁以下に、「バルト神学になお残る一つの疑問」と改題して、滝沢自身の訳が収録されている。その註によれば、この論文は、九州大学文学部欧文紀要哲学第1号(1956年刊)¹⁾所収の論文« Das Grundproblem der Christologie »(「キリスト論の根本問題」)を要約したものであり、「紙数その他の都合上後者〔=「キリスト論の根本問題」〕を和訳することは、他日にゆずることとした」(著作集第2巻464頁)と記されている。それに対して『宗教を問う』(三一書房)100頁によれば、「キリスト論の根本問題」があまりに長くなりすぎたので、記念論文集に寄稿するに際して、「始めから書き直さなくてはなりませんでした」と言われている。

「キリスト論の根本問題」の執筆時期については、1954年12月14日付のバルト宛て滝沢書簡において言及されている。それによれば、その時点で滝沢は「キリスト論の根本問題」を一応書き終え、目下ドイツ人の助力を得て推敲しているところであり、翌年3月末にはその抜き刷り(Sonderdruck)を送ることができるであろう、とされている(『カール・バルト=滝沢克己往復書簡』新教出版社、131-2頁)。この事情を反映して、「キリスト論の根本問題」の末尾における脱稿の日付は、1955年3月10日になっている。しかし実際の刊行は遅れ、1956年10月になったようである。また坂口博編『滝沢克己著作年譜』(創言社)183頁で確認されているように、この年譜出版の時点(1989年)で、「キリスト論の根本問題」の邦訳はなく、この事態は今日に到るまで変わっていない。

なお、論文の翻訳とその公開の許可を、滝沢克己氏ご長男の瀧澤徹氏よりいただいた。心よりお礼申し上げたい。

(内容概観)

序 言

- I. イエス・キリストは誰であり、私にとって何を意味するか
- II. 聖書の叙述によるイエス・キリストというひとつのペルソナの三重性について
 - 1) イエス・キリストのひとつのペルソナにおける神と人の実体的統一と作用的統一

- 2) イエス・キリストのひとつのペルソナにおける、人間の形姿としての神の自己啓示、および完全に忠実な賛美としての人の自己限定
 - 3) イエス・キリストのひとつのペルソナにおける、永遠にはたらく人の原型、およびその時間内部的な実現ないし時間内部的に実現された形姿
 - 4) 聖書の叙述におけるイエスの生、および歴史的原像の問題
- Ⅲ. イエス・キリストのペルソナについての聖書の叙述の由来と真理
- A. イエス・キリストのペルソナについての聖書の叙述の由来について
- 1) 「ナザレのイエス」という名のひとりの人の歴史的に過ぎ去った生、およびその周りの環境
 - 2) 使徒たちのもとにおける「キリスト」
 - a) イエス・キリストの形姿（言葉と行為）に関わる使徒たちの記憶
 - b) 聖霊
 - c) 失われた思い出を補足する使徒たちの想像、あるいは福音を宣べ伝えるための思い出の選択
- B. イエスの生についての聖書の叙述の正しさと真理性について
- 1) そもそも歴史学的な正しさという問題の射程について
 - 2) イエスの生についての聖書の叙述の歴史学的正しさと霊的真理について

序 言

この論文のテーマは「キリスト論の根本問題」である——それはキリスト教神学全体の中心的な問題である。今日では、神学者と哲学者のあいだの対決が、百年以上の長い中断の後に、再びあちこちで活発になっているように思われる。そのことには、ひょっとして歴史の内的な必然性と呼び得るようなものが存在するのかもしれないが、そのような内的な必然性それ自身も、たしかに今日の世界の外的な、経済的-政治的な状況に対して無関係ではない。

しかし、それはさておき、私の知る限り、今日に到るまでいかなる神学者も、みずからのこころの最内奥へ哲学的な思索を向けようとしたことなどなく、他方で、現在のいかなる哲学者の脳裏にも、神学を、しかもとくに「キリスト論」を、かれの研究の本来のテーマにすることなど思いつかなかったのである。

ひとりの哲学者が神学すること、すなわち、神について何か積極的なことを

語り、神ご自身をかれの思索の本来的な対象にすることは、今日なお「いかがわしい事」なのである。これは、私たちのここ日本において特に当てはまる。日本では、両者、すなわちキリスト教と西洋哲学が、19世紀半ばになって初めて、まったく突然に、お互い別々に導入されたからである。それ故に、私がここで述べることは、ひょっとして両陣営〔=キリスト教と西洋哲学〕において同情的な微笑を引き起こすだけであるかもしれないし、それも幾つかの点でもっともなことなのである。しかし「イエス・キリストのペルソナ」を、身心を挙げて私の全人格によって、できる限り明晰に把握し叙述することは、それが「哲学」であれ「神学」であれ、私個人にとって最も重要な課題のひとつ、あるいはむしろ唯一の重大な課題なのである。イエス・キリストのペルソナは、私がかつて聖書を通して聞いたことであり、そのとき以来もはや私の脳裏から離れることはなかった。私は、学問的研究——とくに哲学研究——および公的義務がいろいろと課せられており、すでに長いあいだ神学の専門研究から離れていた。それにもかかわらず、この問題の全体が、時間とともに、恵み深い神の賜物である時間とともに、18年前に私が『カール・バルト研究』を公刊した当時よりも、幾つかの点において、私にとっていささか明晰になったと、今日の私には思われる。

それは、ひょっとして錯覚であり、私自身の傲慢に還元され得るかもしれない。もしそうであるならば、そのような傲慢に対して赦しを乞いたいと思う。しかしながら、私が公刊以来イエス・キリストのペルソナにかんしてなしてきた思想を、簡潔に述べることをここで私に許していただきたい。

I. イエス・キリストは誰であり、私にとって何を意味するか

叙述をあまりに広げすぎないために、とりわけ真に事柄に即するために、ともかくひとつの告白によって、話を始めたいと思う。それは、イエス・キリストが私にとって何であり、私個人にとってかれの名に何が含まれているか、という告白である。

使徒マルコ、マタイおよびルカが私たちに伝えるところによると、イエスはカペナウムで或る痛風の男に次のように言われた。安心せよ、わが子よ、あなたの罪は赦された。…立ちあがって、あなたの寢床を取り、家へ帰りなさい。(マルコ2章1～12節)

さしあたり、私にとってこの「イエス・キリスト」は、現実あるがままの私に、今日ここで、呼びかけてくださる御方以外の誰でもない。たしかに聖書のこれらの言葉を介してであるが、かれご自身がまったく個人的に呼びかけてくださるのであり、この同じ聖書によれば、当時かの地で、かれが痛風の男に語られたのと同じように、呼びかけてくださるのである。

しかし、もし私がこの語りかけ (Zuspruch) をたんに肉の耳のみならず、霊の耳でも聞かならば、すなわち、語りかけによって新たに目覚めた理解力で聞き分けるならば、私は絶対に、次のことを承認せざるを得ない。私がそのような聞き分けた時に初めて、かれが私に語って罪の赦しを与えてくださったわけではなく、すでにそれ以前に、私がかれのことをまだ何も聞かず何も理解しなかった時にも、かれは常にそのように私に呼びかけてくださったのであり、それどころかそれ以後も、私がこの世界のどこに、どのように存在するかにかかわらず、私がかれもこの世界に存在するか否かにかかわらず、かれは同じように私に呼びかけてやまない、ということ。

しかしたんにそれだけではない。つまり、もし私がこのことをすべて承認するならば、同時に私は次のように告白せざるを得ない。かれの呼びかけは、私がそれを——今であれ如何なる時であれ——聞いて理解することに、永遠かつ本質的に先行する、と。どんなに自由な想像力をもってしても、どんなに繊細な思弁をもってしても、かれの呼びかけの背後に私は行くことができない。私が一瞬でも存在するところには、かれご自身がすでにおられ、永遠の昔から永遠の将来へ向けて断固としてこう呼びかけられる。「安心せよ、わが子よ、あなたの罪は赦された。立って歩きなさい」。ただ実際は、意識のないし無意識的にかれに注意を払わず、かれの驚くべき自由宣告にくりかえし逆らい、安心

してかれのもとに留まるのではなく、人間的生の唯一の現実的な地盤、父〔なる神〕の家から遠く離れたところに立って歩もうとし、ついには、瀕死の病で、痛風の男の寢床に縛りつけられている我が身を見出すのである。

したがってイエス・キリストのペルソナについて、私は聖書によってとりわけ次のように告白する——イエス・キリストは、一瞬も私を見捨てることなく、ただひとり、罪からの永遠の自由を私に宣告してくださる御方である。あるいは次のように言った方がよいであろうか。かれは、私の罪の赦しを与えてくださる永遠の語りかけ (der ewige Zuspruch meiner Sündenvergebung) 以外のなものでもなく、かれはその語りかけを、私の人となり、私の行為と意志にまったくかかわらず、それどころか誕生と死にもまったく依存せず、永遠の昔から決定された喜ばしい事実として、一瞬ごとに新たに私自身に与えてくださる。罪ある人間的主体の私と、絶対に消し去ることのできない区別によって、絶対に分ちがたく一つであるこの永遠の言 (dieses ewige Wort) として、イエス・キリストは唯一の神、それ自身なのである。

しかしさらに、この唯一の神として、すなわち、私にも誰にでも理解できる人間の言葉でかくも恵み深く私に呼びかけてくださる神として、かれご自身は人間的本性を有しておられ、この本性は、私の本性およびこの地上に事実存在するすべての人の本性とまったく同じである。それ故にイエス・キリストは、文字通り神人 (Gott-Mensch)、言わば神的小よび人間的という二つの本性の実体的統一である。ただ、かれにおいては、みづからが肉とペルソナ的に統一されているにもかかわらず、その導きの主体 (要素) がもっぱらかれの純粋に神的な本性に存するのに対して、私においてはちょうど逆で、唯一の神であられるかれが、私のすべての罪を恵みによって完全に廃棄してくださったにもかかわらず、その働きの主体 (要素) は、罪という海に沈んだ私の本性のうちに今なお閉じ込められている。換言すれば、かれ (Er) は、実体的に肉と一つにされているにもかかわらず、まったく神であられるのに対して、私はその逆であり、同じ神に支えられ、浄められ、その限りで同じく神と実体的に一つで

あるにもかかわらず、まったく罪人に留まるのである。

しかしこのことは、イエス・キリストが人として現実に歴史において語られ行為されたわけではない、などということを謂っているのではない。否、神と人の「永遠的実体的」な統一は、「時間的作用的」な統一なしては人間の想像力の所産にすぎないであろう。イエス・キリストはまったく私たちすべてと同じである、すなわち、かれはまったく無力な小さき人としてこの地上に生まれ死んだのであった。相違はただ次の点にだけある。かれにおいては、神が人として行為しているにもかかわらず、この行為がおのずから (eo ipso) 同じ人による人としての行為であるのに対して、私たち人においては、後者の行為〔=人が人として行為すること〕が、私たちの本性と神との実体的統一にもかかわらず、前者の行為〔=神が人として行為すること〕からくりかえし離反するのである²⁾。

II. 聖書の叙述によるイエス・キリストというひとつのペルソナの三重性について

以上において私は、「イエス・キリスト」が私にとって何であり、誰であるかを、まったく率直に告白した。そのことから、イエス・キリストのペルソナにかんして、おのずから私にいっそう明晰になったことを、今や以下でいささか詳細かつ体系的に論じたいと思う。

次のことが第一に注意されるべきである。イエスと私のあいだの相違は、しばしば表象されるのが常であるように、神と人の実体的統一が、かれにおいてのみリアルであるが、私においては願望や想像の産物にすぎない、などということではない。もしそうであるならば、私を慰め、確かな希望を持ってこの地上に立って歩む力を私に与えてくれるのは、主なる神ご自身ではないことになるであろう。私たちが気付くか否かにかかわらず、すべての人の行為の背後には、永遠の神ご自身が立っておられ、その時間的な〈人の形姿〉(Menschengestalt)——すなわちイエス・キリストにおいて、隠れて共に行為

しておられる。私たちが知覚するか否かにかかわらず、永遠の神ご自身が、人間の言葉というそのつど限定された歴史内部的な形において、要求するのではありません、事実存在する人間のいかなる言葉も——正しい言葉のみならず偽りの言葉も——歴史において存立することはできない。なぜなら、そのような要求に基づいてのみ、私たち人間においてはいつも、正しい発言と偽りの発言がお互いから区別されるからである。例えば、神についての私の発言が正しいということも、その発言が、人の言葉においてご自身を語り出される神³⁾に対してまったく忠実にかたどられ、かれの言葉 (Seinen Worten) に呼応して形成される、ということ以外の何ものでもない。このかれの言葉は、私の内から語られる限りでの正しい言葉に、たしかに時間的な意味ではなく、即事的 (sachlich) な意味においてであるが、絶対に先行する。

今や私たちは第二に、より危険な更なる一步を踏み出さなければならない。すなわち、神学者のあいだで一般に支配的な意見に反して、私たちはあえて次のように主張する。神と人のあいだの実体的統一のみならず作用的統一も、この地上に存在するすべての人において一瞬ごとに新たに現在のであり、それどころか事実的にひとつの絶対的な現実である、と。

イエスにおいてと同様に私においても、ひとり的人是はけっして神から分離して存在することはできない。このことがおのずから意味するのは、人の行為は、人の形姿における神の行為と、実際に一つであるということである。すなわち、人の行為においてはまったく隠されているが、同時に、主としての神が人の形姿において行為しておられる、ということである。ただ私においては、私に帰属する限りでの行為は、神に帰属する限りでの神の行為に⁴⁾、完全に対応することはけっしてない。換言すれば、両者の統一は、まったく積極的な意味において歴史内部の身体化された現実となることはけっしてない。他方、人としてのイエスの行為は、かれのペルソナの本質に対応して、常に人の形姿における神の行為でもある。すなわち、永遠の神の意に完全になかった人としてのかれにおいては、人間的本性の・根源的・永遠的な・原型 (Typus) は、単

なる理想にすぎないのではなく、いつも同時に、歴史的世界において現実に存在する人間的形姿、すなわち、時とともに生じて過ぎ去る人間的形姿でもある。

しかし、私たちがイエスのペルソナの比類なさを認めるとき、第三に、今までほとんどまったく注目されなかった一步を更に進めなくてはならない。つまり、イエス・キリストの人間的本性にかんして、経験的で可視的な形姿と、完全な人間という・永遠に新たな・不可視的な・原型とは、混淆することなくお互い区別されているのである。

というのは、先ほど言ったように、イエスの人間的本性において、神が人としてみずからを表現すること、および人が人として神を表現すること（あるいは神の前での人の自己限定）という二つの要素は⁵⁾、その無限の区別および絶対的に逆にできない順序にもかかわらず、完全に同一である。しかし、まさにこの同じイエスが、永遠で不可視の人間的原型である限り、あの時あの処でマリアから生まれたあの形姿を、必ずしも取ることはなかったのである。もっとも、この原型は、或る特定の処、或る特定の時においてしか、歴史における可視的な存在を取り得なかったのであるが、例えば、歴史における個々の現実的な形姿から後で抽象されたような単なる「概念」ではない。この原型は、むしろすべての個々の形姿から独立したものであり、最初の間であるアダムの創造においてさえずでに前提されていた。この前提のもとでのみ、すべての人間的形姿、したがってマリアからのイエスの誕生も、歴史において出来事となり得た。それ故に、私たちは事柄に従って、イエスにおける永遠の原型と人間の可視的な形姿を、きわめて鋭く、しかも次のような両極として区別せざるを得ないのである。すなわち、同じイエスにおける神と人の実体的-事実的な統一から必然的に帰結し、そのようなものとしてお互い分かちがたく関係し合うが、けっして相互に還元し得ない両極である。このことは、聖書自身が、例えばアブラハム以前におけるイエスの先在 (Präexistenz) について語るとき⁶⁾、ひょっとして証していることかもしれない。

イエス・キリストは、神ご自身として、言うまでもなく永遠の「御子」ない

し太初に神のもとにおられた「神の言」(das Wort Gottes)であり、すべてのものはこれによって作られ、作られたものでこれによって作られていないものは何もなく、この言のうちにいのちがあった。そしてこのいのちは人の光であった。神は、肉ないし人としても、——肉ないし人の主体がもっぱら神の言である限り⁷⁾、したがって同じ肉が、完全な人という永遠の原型である限り——、「創造の第一日」から被造世界の「最後の日」に到るまで、止むことなく到る所で存在し、働いておられる⁸⁾。それ故に、およそ二千年前の当時、受胎の日とイエス昇天の日にとくに新たに起こったのは、ごく簡単に表現すれば、ひとつの人間の形姿がまさにそのときにこの地上で発生し、そして消え去ったということ以外なものでもあり得ない。この形姿は、永遠の昔からすべての人の可視的な原型として立てられ、たんに生まれることによってだけでなく、十字架の死に到るまで従順であり続けたことによっても、永遠にわたってまさに可視的な原型になった、あるいは可視的な原型にされたのである。したがってそのときに変えられたのは、神の性格でも、イエス・キリストのペルソナにおける人間の永遠の原型でもなく、むしろ私たちの歴史的世界、とりわけユダヤ人の歴史的世界、それと同時に私たち人間に帰属する世界の全体的な状態でしかあり得ない——しかもそのとき以来、人間の生とともに被造物の生一般にたいする真の完全な尺度、中心ないし基礎が、私たちの罪の極度な反抗にもかかわらず、まさに私たちの永遠の救いのために、私たちのただなかで、すべての人が見て触ることのできる形態において、最終決定的に出現したということである。(なんとという測りがたき恩寵であることか。私たちはこの恩寵を、感謝をもって、また恐れとおのきをもって、認めざるを得ないであろう。)

これが福音書記者たちによるイエス像であり、このイエス像を私たちは今日もなおかれらとともに体験している。しかしまさにこの処で、すなわちイエスの生が、その厳密に歴史内部的な事実的な形姿において——福音書記者たちに

よって把握されたように——知覚される処で、運命的とも思える問いが私にとって不可避となる。つまり私は、第四に次のように問う。私たちは、福音書記者たちのイエス像を、そのモデルから、すなわち、あの時あの処で現実に歴史的にこの地上で生きた〔歴史的イエスという〕モデルから、きわめて鋭く区別すべきではないのか、と。しかも、前者〔=福音書記者たちのイエス像〕が後者〔=歴史的イエス〕からなんらかの仕方で逸れてしまったという前提のもとだけでなく、前者〔=福音書記者たちのイエス像〕が少なくとも本質的に歴史内部の根源的なモデル〔=歴史的イエス〕を完全に正確に写し取っているという敬虔な仮定のもとでさえも、区別すべきではないか。

この単純で見かけは自明な区別が、もしひとえにイエス・キリストのひとつのペルソナにおけるあの三重性との必然的な関連において、精確に把握されるならば、この区別から、理論的ならびに実践的に、キリスト教会とともにそもそも今日の世界にとって、何が帰結するのか——これについて、私にとって明晰に思える範囲内で、以下の段落で述べることを試みたい。

Ⅲ. イエス・キリストのペルソナについての聖書的叙述の由来と真理

A. イエス・キリストのペルソナについての聖書的叙述の由来について

福音書は、ヨハネ福音書のみならず共観福音書も、「歴史学的」(historisch)⁹⁾な書ではなく、むしろ「かれらの信仰の証し」の書であるというのは、今日広く流布した見解である。このことにかんしてまだ決定されておらず、それ故にもっと精しく探求されるべき問題が残っているのではないかと疑う者は、少なくともプロテスタント世界には誰もいない。しかし他方で、福音書は福音書記者たちの単なる創作であり、歴史内部的に限定されたもろもろの出来事——それ自体、学問的歴史学的研究の対象とされ得るし、されなければならない出来事——に対して、直接の關係を持たないと考える者もまた誰もいない。福音書記者たちによって叙述されたイエスの生の像は、疑いもなく、或る特定の、そ

れどころか歴史学的な人物に対して、なんらかの特定の関係を有している、と言って差し支えない。その人物は、およそ二千年前に貧しい身なりで、裸足でイスラエルを巡り歩き、単純な説話と驚嘆すべき行為によって、すでにかれの生きている時に、かれの周りの世界に消し去ることのできない大きな影響を与えた。実際かれは、弟子たちにとってかれらの全生涯の唯一の尺度、中心および基礎と見なされた。

今やかれが、またかれとともにすべてが、突然弟子たちから奪い取られた。かれは、できなかつたにせよ、あるいはむしろそのように欲したにせよ、いずれにせよ、自分のためにも弟子たちのためにも、十字架からみずからを救い出すために何も為さなかつた。もともとの「イエス」、直接に見ることのできるこの人間的形姿は、この地上ではかれらから最終決定的に失われてしまった。(かれが復活したと仮定すると、それと同じ信仰によれば、かれはやはり「天へ昇った」のだから!) その後、地上でのイエスの生を叙述する際に、十分な根源的な資料としてかれらに役立ち得るようなもので、なお何が残ったであろうか。第一にそしてさしあたり、明らかにかれら自身の記憶だけである。

しかしかれら「自身」の記憶は、人間の記憶一般と同様に、たんに「かれらのもの」ではあり得ない。ここでとくにかれらを強いて深い省察へ向かわせたのは、「かれ」に対する「かれら」の記憶、十字架での残酷なかれの死に対する記憶であり、かれの死はかれの生きていた時の驚嘆すべき行為と言葉とかくも緊密に結びついていた。もし再び、まったく突然に、かれらにとって霊の眼が上から新たに開かれるのでなかつたならば、その省察は、ついに必ずや絶対的な絶望および神と自分自身への呪いを引き起こしたであろう。しかし、この霊は、かれら自身の慰め主¹⁰であるにしても、決してかれらに属しておらず、ひとえにかれに属している、あるいはむしろかれご自身なのである。今やかれらにとっても明らかになったように、かれが、かれの人間的な生に対する〈永遠の神的な主体〉として、私たちすべての人間においても働く限りにおいて、この霊はかれご自身なのである。私たちがかれを、「恵みによって人になられ

た〈全能の父なる神のひとり子〉と信じる、すなわち、かれによる罪の赦しと永遠のいのちの約束を、今すでに喜ぶことができ、喜ぶべきために、かれはそのように働かれるのである。

したがって、永遠の昔から父と子なる神と一つである聖霊こそが、イエス、しかもこの地上で苦しめられたイエスの生についての聖書の叙述の源泉、第二の、しかも唯一の創造的な源泉である。この聖霊は、使徒たちの生の、言わば隠れた裏側に、永遠に住んでおり、止むことなくかれらの内で働いておられる。聖霊によって開かれた眼で振り返って見ると、まさにこの同じ霊が、聖霊を「受け取る」前の絶望的な悲しみのただ中で、かれらの師の恐ろしい死について徹底的に考えることを、かれらに可能にしたのであった。そしてついにかれらは、かれら自身の永遠の死を突破して、この聖霊を、かれらをこの永遠の死から目覚めさせるイエスの霊として、「肉となった」創造者の永遠の言として認識し、自分自身を、かれご自身によって自由宣告を受けた罪人であると認め、原罪が続いているにもかかわらず、かれの福音を宣べ伝えて天の栄光に与かるために召された者であることを、喜びをもって告白するに到ったのである。かれらがみずからの告白をこのようにはっきりと言葉で述べたかどうかにかかわらず、イエス・キリストの形姿に対するかれらの記憶が、霊によって火をつけられ、かれらの内で再び新たに息を吹き返す。かれの形姿は、今やかれが生きている時よりも澁澁としてかれらの眼の前にあり、成長し、日夜ひとりでに完成されていく。その結果、何がもとの思い出であり、どのような想像が後からかれらによって付け加えられたのか、もはや誰もはっきりと区別することができない。それは、すべての私たちの「思い出」においても或る程度起こる通りである。かれらにとって最も重要なことは、十字架に付けられたかれらの師のペルソナにおける本質的なこと——「私たちの主、イエス・キリスト、神の子」——を、誰にとっても見て理解できるようにすることだけであり、かくて神を取るか取らないかという自己決断なくしては、もはや誰もかれについて聞くことができないのである。

このように私たちは、使徒たち自身の想像と、そこに共に働いている選択的な思索を、かの第一の源泉と補足しあう第三の源泉——使徒たちの叙述の源泉、ないし私たちが今日福音書に見出だすイエスの生の像の源泉——と認めざるを得ない。なぜなら、私たちは上で聖霊それ自身を使徒的なイエス像の「第二」の根源として示したが、もちろん聖霊それ自身は、福音書記者たち自身の記憶、想像および選択的思索と同じ意味で、使徒的なイエス像の根源であるわけではないからである。使徒的なイエス像は、たとえそれがどんなに完全に聖なるものであっても、聖霊から連続的に流出したものではない。使徒的なイエス像と聖霊とのあいだには、絶対に架橋できない神的な限界があり、その限界によってのみ、神はご自身を人とひとつにし、ご自身を人間精神に啓示される。このことは、とくに緻密な弁証法というわけではなく、まったく単純な事実なのである。その結果、私たちは「聖書」もまた罪なる人間のひとつのわざと、見なさざるを得ない。それどころか、私たちは同じ聖書を媒介にして聖霊なるイエスの霊を「受け取った」のであり、その霊を聖書の過ぎ行くことのない真理の唯一の根源と認めるが故に、それだけいっそう断固として、そのように見なさざるを得ないのである。それ故に、私たちはいずれにせよ、次の問いを明らかにすることを拒むことはできない。それは、どの程度に聖書のイエス像は本質的また歴史的に正当であるか、という問いである。

B. イエスの生についての聖書の叙述の正しさと真理性について

上で言われたことによって容易に表象できるのであるが、イエスの生について聖書が描く像は、「歴史学的」(historisch)にまったく正しいというわけではない——ここで歴史学的とは、前世紀以来、奇妙なことに、ひょっとして学者世界でのみ流行となった疑似「学問的」な意味でいわれており、歴史的(geschichtlich)な出来事の時間的-空間的状况を、単なる感覚的な知覚の仲介によって確認することに関わっている。なぜなら、この〔歴史学的にまったく正しいというわけではないという〕判断には疑いなく——かく言うために歴史学派

の成果をまず待つ必要などなかったのであるが——記憶の拒否ないし想像力による追加の拒否ということが含まれているからである。しかしながら記憶や想像力は、意識的ないし無意識的に、かれら〔歴史学派〕にとって代用として用いられるとともに、ユダヤ人やギリシャ人等の民族伝統への適応のためにも用いられたのである。

このことを確認すると、なぜ「歴史的な正しさ」(die historische Richtigkeit)をこのような狭い意味に制限すべきなのか、私にはやはり理解できない。というのは、歴史(学)(Historie)とは、普通の意味では歴史(Geschichte)の叙述、しかもこの世界で実際に起こったまさにそのままの叙述と、見なされるからである。それ故に確かなことは、歴史的な学問は、私たちの恣意にも私たちの信仰にも——その信仰がたとえどんなに純粹で繊細なものであっても——依拠してはならず、ただ現実に生じた諸事実のみ依拠することが許されているのである。歴史的な諸事実の確認とは、近世の哲学者たちが言うのを常としているように、原則的に、事実についての価値判断以外の何ものかである。もちろん、このふたつ〔事実と価値判断〕を混同することは許されない。しかし、この世界に生命と関係を持たない事実があるのか、あるいはむしろ、それ自身が生命の発達の或る特定の段階にないような事実があるのか、疑わしいのである——しかもこのことは、あたかも単なる物理的ないし有機的な物が、ひとつの抽象概念にすぎない、あるいは人間的生命のひとつの頽落形態にすぎないなどというのではなく、まさにその反対なのである。なぜならいかなる生命も、例えばヘーゲルの「絶対精神」のように、たとえその最高の形態であっても、それ自身わずかでも事実であることなしに、歴史的にリアルに存在することなどできないからである。換言すれば、一方の現実存在の事実性と、他方の生命の価値性とは、この世界において、常にお互いに対して、同じものの表裏のような関係にある。それ故にロマ書〔8章〕22節でも、次のように言われている。「なぜなら、すべての被造物が私たちとともに憧れ、今なお不安でいるのを、私たちは知っているからである」¹¹⁾。これは、私の考え

では、けっして所謂「擬人化」ではない。しかしここは、立ち入ってそのことを説明するのにふさわしい場ではない、あるいはまだないのである。

いずれにせよ生命はまた、その思いと決断を含め、またそのもろもろの聖なる価値とむなしい無価値も含め、要するにその生命のはたらきが及ぶ範囲の全体を含めて、徹頭徹尾、この地上におけるひとつの制限された事実なのである。それ故に歴史学的な学問を、歴史 (Geschichte) の精確な叙述、すなわち現実に生起した諸事実の精確な叙述として¹²⁾、定義することを欲するならば、その定義を、その定義のまったき到達範囲において受け取らなければならない。つまりその際、歴史学的な学問の対象ないし領域を、恣意的に人間的生命の次のような内容に制限してはならない、すなわち、たんに社会科学のみに、ましてや普通の意味で自然科学のみに取り扱うことのできる内容に制限してはならない、と私は思うのである。そのような制限の結果、人間的生命の最内奥の核心を厳密な学問的研究から締め出し、そのことによって、少なくとも「キリスト教信仰」を、客観的真理という照りつける日光にさらすことを欲しなくなるのである。

おそらく歴史的に以下のことがひとりで理解されるであろう。両世界大戦によってさまざまな生哲学および超越論的哲学の無力が明らかになった今日でも、正統主義の神学者たちやアカデミックな哲学者たちは、例えば「実存主義」のスローガンのもとで、もっとも固有なかれらの領域から、他の「個々」の学問の客観主義的方法を締め出そうと試みている。なぜなら、ヘーゲル的体系の崩壊の後に現れた歴史学的な実証主義は、人間精神の歴史にかんして、方法的にたんにひとつの疑似学問にすぎなかったからである。この疑似学問の代表者たちは、自分自身も、かれら自身の対象の本質も、正しく理解しなかったのであり、それどころかかれらは、他の諸学問、例えば物理学や国民経済学の厳格な方法すら正しくわがものとせず、その結果、みずからの「実証主義」にもかかわらず、他の諸学問の領域の多くの代表者と手に手を取って、人間的理性ないし人間の実存の本来の限界をあまりに安易に踏み越え、ロマン主義的ないし

単なるイデオロギー的な構築物の中に陥ってしまった。しかしかれら〔正統主義的な神学者や哲学者たち〕はさらに、かれら自身の領域で、客観的-学問的な考察、解明および批判一般を断念し、次に、ただ実践的-選択的な「決断」や政治的-社会的な対決だけに、ついには「歴史の諸判断」だけにみずからをささげるとしたら、それは、まさにイエス・キリストのペルソナにおいて私たちに顕らかになった人間的現実存在の唯一の實在的な限界を、他の人たちと同様に、再び完全に忘れてしまったことのひとつの徴ではなかろうか。学問研究者たちが限界を踏み越えたことに対するかれらの規則通りの批判は、むしろ密かな口実ではないのか、と私は怖れるのである。そのような口実において、かれらは、かれら自身のものであるが、本当はたんに恣意的にすぎない「信仰」を——恵み深い全能の神の比類なき聖なる啓示についての発言や文書において——みずからと他者に対する言い訳にするか、あるいは、人間の恣意を唯一の真なるものと強弁し、公然とあらゆる虚無的なものにみずからを委ねるか、このどちらかである。その際、「実存主義」という合言葉は、この問いそれ自身の核心を変えるのに、何の助けにもならないであろう。

しかし今はそのことは置いておこう。いずれにせよ私たちは、イエスへの私たちの信仰にかんして、歴史学的な正しさという問いを、例えば「神的」ないし「実存的」な決断という名において無視してよい権利など持っていないのである。このことがさらに謂っているのは、私たちがみずからの信仰の内容を、聖書、すなわち使徒たちの信仰に照らして再点検するというだけでなく、結局のところ、とりわけこの後者〔=使徒たちの信仰〕にかんしても、しかも後者の本質的な内容にかんしても、容赦なく次のように終りまで敢えて問うということなのである。この〔使徒たちの〕信仰、すなわち、地上でのイエスの生について使徒たちの描く像が、「イエス」という名のひとりの人の、歴史内部において現実に生起した生の像と、完全に一致しているか——あるいはしていないか、と問うことなのである。

もちろんこの点において、まだいかなるキリスト者も、イエスの生についての聖書の叙述が歴史学的に正しいことを疑うことはなかった。あるいはむしろ、その問いそれ自身が、多くの人にとって疎遠で無益であり、それどころか異端的にさえ見えるのである。なぜなら、イエスの生それ自身についての聖書の叙述の本質的内容にかんして、同じ聖書の叙述に属する二種類の正しさ、つまり、叙述された〔イエス〕像の歴史学的な正しさと、その像に固有な霊的な真理性とを、截然と区別することなど、まだ誰の念頭にも浮かんだことがなかったからである——この事態も、上で聖書の叙述の由来の把握について詳述したことから、とてもよく分かることではあるが。

なぜなら、福音書記者たち自身が叙述しようしたのは、明らかに、たんにイエスに対するかれらの思い出などではなく、イエスに対するかれらの信仰でさえなく、ましてやかれら自身の・ひょっとしてとても繊細な・哲学的思想などでなかったからである。(聖書について、それは歴史学的な書物ではなく、まったく「信仰の証しの書」であると、或る意味で主張できるのであるが、このことがこのように誤解されてはならない。) そうではなく、それとは反対に、かれらの叙述の唯一の対象は、ひとりの現実的な人であり、その人はあの時あの処で全身全霊をもって、行為と言葉によって事実存在し、「ナザレのイエス」と謂われ、「ヨセフの息子」と見なされた。然り、かれらはこのひとりの人以外の何ものも叙述しようとは思わなかった。しかもまったく素朴に、かれが実際にあるがままに、すなわち、かれらに見えるようにではなく、むしろかれ自身が、かれらの信・不信にまったく依存せずに、この地上に存在し、生きたままに、叙述しようと思ったのである。そのようにして、またそのようにしてだけ、かれらはイエスの生ないし人格についての次のような叙述に到ったのである。すなわち、かれは「神の永遠の言であったのみならず、今もそうであり、永遠にそうであり、その言は、時到達して、聖霊によって孕まれ、おとめマリアより生まれ、(すなわち、人間の歴史の内部において時間的にも空間的にもまったく特定の位置を占め、目に見える形姿を取り)、苦しみを受け、ポンテオ・

ピラトのもとで死なれた、等々」。

使徒たちのこのような叙述を耳で聞くことによって、私自身が今ここにおいて心のうちで、すなわち身心的な全人格をもって、聞き分けたことを、またいつも新たに聞き分けていることを、私は第一節で詳しく述べた。つまりそれは、創造者にして和解者であられる神の永遠の言であり、その言が、明晰かつ判明に私に理解できる人間の言葉で、驚嘆すべき要求を、現実に私に与えてくださったのである。あなたの罪は赦された、起って歩きなさい、と。使徒たちの叙述による「イエス」は、疑いもなく、唯一にして三一の神ご自身であり、その神が、或る特定の個別的な〈人の形姿〉として、この地上でご自身を啓示された。したがってその形姿は、人の自己限定¹³⁾にかんして、同時に人間的生一般の完全な原型であった。イエスは、それ自身において現実に生きているこのような人間の原型として、たしかに私たちのひとりと同じように苦しめられたが、私たちとは原則的に異なって、咎なく苦しめられ、私たちすべてをもちろむの罪ないし死の棘から解放された。このことは、かれの復活と昇天において、使徒たちに顕らかになった通りである。イエスにおいてのみ、人は現実に〔本来の〕自分自身へ到った、すなわち、その根源的本質（神の像）に完全に対応する形姿をとった——神がご自身を人に啓示されるのとちょうど同じように、人がみずからにおいてかれの創造者なる神を表現することによって。

今やしかし次のような問いが生じる。福音書記者たちのこのようなイエス像は、使徒たち自身と同様に私もまた、いっそう新たな大いなる賛嘆と歓喜をもって、絶えず思い描くのであるが、はたして歴史の内部に現実に存在するその対象と、完全に一致するのか、という問いである。キリスト者たちは、その問いに対して、無制約な然りをもって答える。私個人も、もし私の敬虔な憧れを充足することだけに関わり、事柄そのものの真理に関わるのでないなら、おおいに喜んで、かれらに賛同したいところである。この点でキリスト者たちがまったく正しく、したがって「まことの神、まことの人」という使徒的なイエス像が、歴史的-事実的な観点においてもまったく「正し」かったのであ

り、歴史的な「ナザレのイエス」は、感覚的な印象のためだけでなく、霊的な内容に照らしても、実際にそれ〔=使徒的なイエス像〕の原像であり、それ結果、私たちが今日福音書において有している使徒的な〔イエス〕像は、その完全な模写像、少なくとも本質においてまったく忠実な模写像以外の何ものでもないということも、たしかに可能であるばかりか、おおいにありそうなことである。

しかし、まさに問われるべきは、このような歴史的な正しさが、イエスの生の聖書的叙述の霊的真理に対して、ただひとつ可能で実在的な根拠であるのか、あるいは歴史的な正しさを伴わないこのような叙述は、たんに主観的な空想にすぎず、いわゆる「キリスト者」にとってだけ価値のある「信仰表明」にすぎないのか、ということである——ここで信仰表明とは、キリスト者以外では、事実的にも本質的にも実在の根拠を持たない表明であり、また実在の根拠とは、すべての人に厳密に妥当し、いわゆる「キリスト教」が私たちに疎遠であるか親密であるか、私たちの気に入るか否かに、まったくかわからず、私たちが留保なしで承認しなければならないような根拠である。このような問いに対して、私は断固たる否をもって答える。

なぜなら、私の考えでは、次のようなこともたしかに可能だからである。すなわち、ナザレのイエスという根源的な歴史的形姿は、使徒たちにとってかれらの生の唯一の尺度と見なされたが、すべての他の人たちにとって、いや、生まれつきの本性にしたがえば、使徒たち自身にとっても、躓きであったし、聖書に叙述されているほどまったく完全というわけではなかったが、使徒たちはそこ〔=イエスの歴史的形姿〕における真実を、まったく純粋に、すなわち、その永遠に実在的な根柢からまったく真に理解し、きわめて印象深く、永遠に活き活きとしたイメージにおいて再現した——このようなことも可能なのである。例えばそれは、才能ある画家が、たしかに美しいけれどもまったく完全とはいえないモデルを用いて、もっとも完全な形像を制作することができるのと同様である。あるいはむしろ、もっとふさわしい例を引き合いにだすと、歴史的に現に存在したイエスの形姿と、新約聖書におけるその像との関係を、きわ

めて完全な未聞の傑作と、その傑作と精神においてまったく一致している・それ自身もひとつの傑作である・同じく真なる・模写像との関係と、比較できるであろう。もちろんその際に、模写する画家は次のように言うであろう。自分は師匠の原像に何ももの付け加えるつもりはなかった、ただ、仕事におけるみずからの力量の故に、ひょっとして原像を損ねたかもしれないことを恐れる、と。使徒たちのかれらの師に対する態度も、たしかにそのようであった。なぜなら、実際にかれらの念頭にあったのは、かれら自身の生の全体を、言葉においても行為においても、かれらの師の生と同じように形成すること以外の何もものでもなかったからである。

しかし、そのことは別に悪いことではない。そのことによって、使徒たちの生を、あるいは尊厳と真理にかんしてかれらの主を模写的に叙述することそれ自体を、その原像と同じく自立した傑作と認めることが、いっそう私たちの義務となる。師の可視的形姿に対する使徒たちの歴史内部的な関係は、たしかにとても幸運であり、驚嘆すべきでさえあるが、その関係が使徒たちを誘惑して、神的な真理の問題にかんして、みずからに対する何か特別な権利を要求させたり、ましてやかれら自身の責任を回避させたりすることがあってはならない。逆に言えば、以上のことが意味するのは、かれらの生の靈的真理の問題、ないしイエスの生についてのかれらの叙述の靈的真理の問題が、もっとも包括的な意味における「歴史学的な正しさ」の概念に、まったく依存していない、ということ以外の何ものでもない。

上のことに含まれる真実が何であるのか、またイエスのペルソナについてのかれらの叙述が何をまったく実在的なものとして顕らかにするのか、ということについて、私たちはもっとも本質的なことをすでに第一節で述べた。つまりそれは、第一に、永遠に驚嘆すべき・神と個々の事実存在するそれぞれの人のあいだの・実体的ないし作用的な・統一である。第二に、この同じ統一から必然的に帰結する・同じく驚嘆すべき仕方でも永遠の昔から働いている・人間の・原型（人間の歴史の・それとともに被造物の歴史一般の・最内奥の・本質）で

ある、第三に、これまた未だ聞いたことがないほど生き活きとした・驚嘆すべき・ひとりの人の・表象像である。この表象像においては、かの原型それ自身が直接的に現実である、換言すれば、ひとりの人としての神の自己啓示が、ひとりの人による神の表現ないし同じ人の自己限定と、たんに理想としてだけではなく現実においても、完全に一致しており、それ故にこの人は、もっとも厳密な意味において、神的本性だけでなく、人間的本性をも有しているが、本来的には、人間的というよりもむしろ神的と言われなければならない。

以上が三つの根拠であり、この根拠の故に、福音書記者たちは、かれら自身だけで、すなわち歴史学的な正しさについていかなる要求もすることなく、永遠に真実であり、真実で在り続ける。しかし、このことが意味するのは、「神の子イエス・キリスト」のペルソナについての聖書の叙述の真理が、当該の歴史の・あるいはむしろ人間の歴史の・それ故に被造物の歴史一般の・学問的-歴史的な・研究にかんして、まったく無意味だというようなことではない。

なぜなら、上で述べ、すでに歴史的由来に照らして考察したように、使徒たちが同じ叙述に、すなわち、イエスのペルソナの永遠の性格についての思想に、到達したのは、例えば、時間的および空間的に限定された・可視的に事実存在する・形姿を、まったく度外視して、言わば空^{くう}に向けて思弁ないし創作したからではなく、むしろただ、ひとりの人の現実の生を叙述することを通してであった。そのひとりの人は、この地上で使徒たちのただ中であって、教師にして師として、かれら自身の生死の活ける尺度として、立ちかつ歩み、それどころか多くの人にとって「大工ヨセフの息子」としか見なされなかった。使徒たちの関心の対象は、まったくこのひとりの人自身の・歴史的に事実存在する・形姿なのであった。この形姿に面してのみ、かれらの「心」は「燃えた」のであった。この形姿が、ただひとつ真実な・永遠に実在的な・発生根拠を、それ自身のうちに含んでいる限り、この形姿においてのみ、かれらは神と人のあの活ける実体的-作用的統一を発見したのであった。その統一は、今やかれらの信仰によれば、かれらの師がみずからその死の前に言ったように、かれら自身

の内にも変わることなく常に住んでいる——それは、かれらとすべての人が、神と等しい聖霊を通して、この同じ統一を、また罪の赦しを、かれら自身によってはけっして到達し得ない神の恵みとして、信じることができ、信ずるべきためなのである。

しかしこのことはもちろん、神と人のこの統一が、イエスが地上に生きていたときには、イエスがかれらから空間的に離れているが故に、かれら自身のもとに永遠に存在するわけではない、などということを用いているのではない。否、神と人の永遠の活きた統一は、かれら自身のもとに、かれらの師に劣らず実在的に、その後も存在し続ける。この統一はむしろ唯一の実在的な要素であり、そこからそこへ向かってのみ、イエスの歴史的な生も、あるいは歴史内部的な・積極的ないし消極的な・イエスとの・交流も——使徒たちの叙述がそれと完全に一致しているかどうかにかかわらず——起こり得たし、現実にも起こったのであり、それ故に、なおさら原理的に、すなわち厳密に学問的な方法に即して、理解され説明され得るのである。

イエス・キリストのペルソナについての聖書的叙述の靈的真理が——私たちはこう言って差し支えないであろう——それ自身のうちに含んでおり、私たちに提供してくれるのは、実際の生についてのただひとつ正しい道だけではない。同時に学問的・歴史学的な研究と解明についての真の方法ないし諸原則も、含んでおり、提供してくれるのである。研究と解明の対象となるのは、まずとりわけ、一連の・相互にきわめて親密に関連しあう・特定の・歴史的な・出来事、つまり、「イエス」というひとりの人の現実の生、あるいはイスラエルとキリスト教会の全歴史であり、それと同時に究極的には、人間の歴史、それどころか被造物の歴史一般である。なぜなら、使徒たちの叙述にしたがって、イエス「像」を「救済史」の中心において理解するとは、その像から事後的にひとつの特別な抽象的概念を抽出することなどではなく、逆に、きわめて深く隠されている・永遠に実在的な・普遍的に働いている・限界線そのもの、〈おのおのの、同じく実在的に事実存在している、人間的な生〉に対して置か

れた限界線そのものを、まったく単純に知覚すること(すなわち、マリアが神の子を受胎したのと同じように、聖霊によって受け取ることを謂うからである。この知覚もまた、この限界を、〈たんに私たち人間だけでなく、すべての被造物に共通な根源的で永遠に新たな基盤〉として、〈すべての時間的な事実存在の基盤〉として承認することがなければ、けっして起こり得ない。

したがって聖書の叙述によるイエスのペルソナが、歴史学的な正しさの問題にまったく依存せずに、私たちの信仰の真の対象ないし真の主体であるのは、たんにその〔=イエスのペルソナの〕不可視的-永遠的な性格だけによるのではない。イエスのペルソナの不可視的-永遠的な性格は、第一に、絶対的主体、すなわち、人間の歴史とともに被造物の歴史一般に対して不動の基盤を指定し、踏み越えることのできない限界を設定する絶対的主体と、見なされ得るが、それと同時に、第二に、きわめて深く隠された・この〔基盤と限界の〕生起それ自体の最内奥において止むことなくはたらく・原理的な・形式、すなわち、歴史の最内奥の本質にして原型と、見なされ得る。しかしイエスのペルソナは、たんにそのような不可視的-永遠的な性格によってだけではなく、人間の世界ないし歴史的世界全体の中心および尺度という第三の契機を形作るところの可視的-時間的な性格によっても、私たちの信仰の真の対象ないし真の主体なのである。

イエスのペルソナにおけるこれら三つの契機は、お互いからけっして分離され得ない。第一の契機からのみ、必然的かつ即事的に後者のふたつの契機が同時に発源するのであり、このふたつの契機もまたお互い必然的に関係し合い、第三の契機はたしかに第二の契機をみずからの永遠の本質として前提するのであるが、他方で第二の契機は第三の契機だけをみずからの時間的な形姿として指し示す。あるいは、同じ事態を最後の契機〔=第三の契機〕からもう一度表現すれば、最後の契機は、最初のふたつの契機の必然的な帰結(被造物に対する神の永遠の要求を時間内部的に完全に充足したもの、逆に表現すれば、主に對する被造物の義務を完全に充足したもの)であり、そのことを媒介にして初め

て、私たちは最初のふたつの契機を、神および私たち自身の事として発見し、そのことによってのみ、真にリアルにふたたび神と私たちの事へ還帰しつつ、かれ〔イエス〕を、たしかに時間内部的であるが、歴史的世界全体に対して常に通用する尺度として、承認する。

その際に私はもちろん、使徒たちがこれらすべてを明確に分析しつつ意識していた、などと言っているのではなく、ましてや使徒たちが近代の自然科学と社会科学の特殊な学問的方法そのものをすでに知っていた、などと言っているのではない。しかしこのことは、私の考えでは、このような学問的方法が、イエス・キリストのペルソナの使徒的な概念において——円の中心という数学的概念においてそもそも円周の概念が含まれているのといささか類似した仕方で——含まれているということを、排除しないのである。なぜなら、数学的な円周は、それがどんなに大きくても、ただ中心から、しかもけっして形象的に表象され得ない人間の精神それ自身を通して、その〔=人間の精神の〕無限空間の内部で生み出され、したがって同じ中心に対する或る特定の関係がなければ、存在することも発生することもできない——それと同じように、いかなる歴史的な進歩も、あるいは社会的周辺地域の拡大も、私たちに意識されようと意識されまいと、ただ創造者なる神と被造物のあいだの永遠に実在的な限界を通してしか、すなわち、かれ (Ihm) ご自身によって措定されたかれの (Seinem) 無限の基盤の上にしか、現実に出現し得ない、したがって使徒的なイエス像に対するそれぞれ或る特定の歴史内部的な関係なくしては、現実に発生することも、存立することもできない。なぜならこのイエス像は、私たちに今なお隠されているあの永遠の限界それ自身の啓示、私たちのために世界の内へ生起した啓示だからである。〈神によって措定された基盤〉の豊饒さ〔「神の忍耐」〕の故に、たとえ私たちが根源的な基盤それ自身の真の概念を持っていないとしても、歴史において、実践的にも理論的にもますます進歩することが、私たちにはもちろん許されている。今日ではむしろ、「啓蒙された」学者たちはたいてい福音をあざ笑う。しかしこのことは、まさにかれらの学問的研究の真なるも

のが、言わば或る特定の歴史的な円周として、その不可欠の中心としての福音を指示していることを反駁する証拠とはなり得ない。あるいはむしろこのこと〔=福音をあざ笑うこと〕は、結局のところ、次のことの徴としてしか役立たないのである。すなわち、かれらは、みずからのまったき学問的な良心をもってしても、福音なしでは、ただひとつ実在的な・厳密に客観的に措定された・歴史的世界の・限界を、踏み越えざるを得ず、したがってこの限界をたんに主観的－イデオロギー的に矮小化し、ついにはあからさまに、虚無主義的な懷疑主義ないし非合理主義に陥らざるを得ない、ということの徴なのである。今日に到るまでの歴史は、歴史主義(Historismus)と唯物論が疑似正統主義的な教条主義を確実に一掃する役割を演じて以来、このような事態の全体を、事実的にも十分に証明している。

イエスのペルソナについての聖書的な概念、ないしイエスの地上的－可視的な形姿という表象像は、そのような表象像として、今日もなお永遠にわたって歴史内部的な根源的尺度あるいは原像として、私たちに役立っている。この表象像に基づいてのみ、歴史的発展のさまざまな正しい尺度、ないし現実に事実存在する物一般のもろもろの秩序は、私たちがそのことを知っているか否かにかかわらず、じっさい客観的に与えられており、その結果、私たちがそれら〔=尺度ないし秩序〕を熱心に求めて努力しさえすれば、それらは私たちによって発見され、理解され、用いられ得るのである。(例えば、経済的な諸価値の尺度も、その本質から見れば、すなわち、その歴史的な発生、またその社会的に規定された形式ないし肯定的および否定的にはたらく役割から見れば、たしかにイエスの地上的な形姿と関連していないわけではない。そのことは、一方で新約聖書において、他方でカール・マルクスの「資本論」において用いられた類比(アナロジー)それ自身が、十分に私たちに暗示している通りである。しかし、このことについては、私たちは後でもう一度戻るつもりである。)しかし逆に、イエスの地上的生について使徒たちが描く像は、ただ次のことにおいてのみ、その永遠の意味を有している。すなわち、その像が、それ自身を越えて、

それ自身を含む歴史全体の永遠の基盤を指示し、そしてそのことによって、私たちが、理論的にも実践的にも、この世の虚無性への輝くばかりのあらゆる誘惑から自由になって、この地上で真に実在的かつ歴史的に思索し、かつ行動するようにしてくれる、ということである。「無神的な狂気の世界に対する闘いにおいて弟子たちのいないイエス・キリスト」ということが、すでにかれの本質から見れば、まったく不可能なのである。この像が、ヨセフの息子の生という現実に過ぎ去った歴史と、完全には一致しないということ、たとえ前提にしても、この像は、後者の〔=ヨセフの息子の生という過ぎ去った歴史の〕真の核心であり、真の核心であり続ける。この核心は、使徒たちにとって実際に可視的な尺度、活ける道標としてはたらし、使徒たちはその本質と由来を、かれの死と昇天の後に初めて聖霊によって真に理解したのであり、「私たちの主イエス・キリスト、神の御子」として、すべての人の前で感謝と喜びをもって告白したのであった。

註

連結点(・)で結ばれた箇所は、ひとつづきの箇所であることを示す。また〔 〕は訳者の補足説明であり、〈 〉は原著にはない訳出上の括弧である。

- 1) 坂口博編『著作年譜』によれば、正確には九州大学文学部紀要第4巻(欧文哲学篇第1号)で、1956年10月に刊行されている。
- 2) この二つの行為は、西田哲学的用語を用いて、前者(「神が人として行為すること」)は、「神の自己決定」ないし「神の(gen. subj.)人における自己表現」(=神が人においてみずからを表現すること)、後者(「人が人として行為すること」)は、「人の自己決定」ないし「人による神の(gen. obj.)表現」(=人が神を表現すること)と言い換えることができる。例えば、『日本人の精神構造』(三一書房)42頁参照。註5を付した本文箇所も参照せよ。

「神が人として行為する」は、後の箇所では、「神が人の形姿において(in der Menschengestalt)行為する」とも言われる。

- 3) 神が人(の言葉)においてみずからを表現すること(註2参照)。
- 4) 「私に帰属する限りでの行為」(die Handlung, insofern sie zu mir gehört.)とは、「人が人として行為すること」であり、「神に帰属する限りでの神の行為」(die Handlung Gottes, insofern sie zu ihm gehört.)とは、「神が人の形姿において行為すること」あるいは「神

が人として行為すること」である(註2参照)。

- 5) 前者は, die Selbstrepräsentation Gottes als Menschen, 後者は, die Repräsentation Gottes durch den Menschen als Menschen である。『バルトとマルクス』155頁の原文では, Repräsentation ではなく, Ausdruck というドイツ語が使われる。註2も参照せよ。
- 6) ヨハネ8章58節。
- 7) 著作集第2巻183頁に, イエスについて, 「神の永遠の御言葉が徹頭徹尾その主体そのペルソナである [...] 一つの現実的な肉」と言われている。
- 8) ヨハネ5章17節のイエスの言葉(「わたしの父は今に至るまで働いておられる。私も働くのである」)を参照せよ。
- 9) 滝沢は historisch と geschichtlich を, 便宜的に「歴史学的」と「歴史的」に訳し分けている(著作集第2巻464頁参照)。ここでもこれに準じたが, Historie は「歴史(学)」と訳した。
- 10) ヨハネ14章16節の「助け主」(口語訳)は, ルター聖書では Tröster (慰め主)と訳される。
- 11) 1912年版ルター聖書は, 口語訳聖書や最新版ルター聖書と訳がすこし違っている。
- 12) 「歴史(学)」(Historie)と区別された「歴史」(Geschichte)とは, 結局のところ, 「現実に生じた諸事実」(die wirklich geschehenen Tatsachen)を意味するのである。
- 13) 『バルトとマルクス』155頁の人の「自己限定」, 著作集第2巻65頁の神の「自己限定」の原語は, ここと同じ Selbstbestimmung である。ただし, 「自己決定」と訳すことも可能である(註2参照)。